2024 年度 学芸フロンティア C 参加報告書

A 類学校教育プログラム　1 年　遠藤梢子

教育哲学/社会学に関する研究したいと教育学部に進学を決めた私は大学で、「元々の興味とは異なるもの」にたくさん触れたいと思っていた。自分が触れてきたものによって思考や価値観、興味が形成されているのならば、自分の進む路を決める前に、少しでもそれを広げたかったのだ。受験が終わった３月、そんな思いで、とある比較教育学に関する研究会に参加した。今振り返ると、それが私を学フロ C に導いた。「もう少し比較教育学を知りたい」ちょっぴりだけどそう思った。４月の履修登録時、一体いくつあるのかと驚きながら「学芸フロンティア……」を一つずつクリックすると、三つ目で「比較教育」というキーワードが目に飛び込んできた。これはもう参加するしかない！

実際に参加すると「英語か……」とはじめは萎縮した。というのも、私は英語が苦手なまま生きてきた。文法もよくわかっていないし、資格だって取っていない。しかし実際に参加すると、なんとかなるものだった。各々の英語/日本語レベルによらず「頑張って喋ってみよう」という空気感が共有されていたからである。私も不思議と積極的になれた。単なる「交流」ではなく、設定されたテーマをもとにしたコミュニケーションであるからこそ、言語を手段として用いるという意識が芽生え、ハードルが下がったのだと思う。

もちろん、自分の言いたいことが言えずにもどかしさを感じる瞬間もあった。質問の意図が伝わらず、何度も言い直すけれど、聞きたいことが伝わらない！みたいなこともあった。しかしそれは、同じ言語同士であっても起こりうることであり、他者とコミュニケーションをとろうとする試みそのものの特徴でもある。さらに言えば、同じ言語で話す時以上に自分の言葉が丁寧に発せられ、そして受け取られたかを、お互いに確認し合いながらのコミュニケーションであった。それは日常生活ではあまり味わえない貴重な経験となり、言葉に対する感度が上がるきっかけになった。

秋学期となった今も、生活のさまざまな場面で学フロ C で学んだことを思い出す。ボールステイトの学生と附属小金井中にいった時のこと。とあるやんちゃな子どもをみて、学芸生、ボールステイト生との三人で、「ああいう子ってクラスに一人はいるよね～」という話で盛り上がった。それは私の心に残っており、秋学期の心理学系の授業で「学級内に『キャラ』の定員はあるのか」ということについて社会心理や集団心理の観点から考察するきっかけとなった。他愛もない三人の会話が、私の秋学期の研究テーマを与えてくれたのだ。もう一つ、私は現在『比較教育学』という授業に参加し、文献をもとにディスカッションを行っている。集中講義で学んだ「違いを生み出す構造について考える」という視点が、自分の中で役立っていると感じている。

さらに、この授業で、言語が壁となる空間に飛び込むことへの勇気をもらった私は、来年の夏から、ドイツに一年間留学することにした。拡散した興味をそのまま持っていって、もっと拡散させたいと思う。

学フロ C は、「元々の興味とは異なるもの」の面白さを知り、深めるきっかけをくれた授業だった。言葉の意味に対する真摯さや、バックグラウンドの相違を超えて人と交わるということ、事象の要素を分析し、それぞれの複雑なつながりを考察すること。学フロ C で得たものを、今後自分が研究したい教育学の分野にとどまらず、もっと大きな規模で生かしていきたい。 私ができる精一杯のこととして。